

・K 夫妻

数年前ですが、夫の知人の K 夫妻が電撃離婚なさいました。あんなに幸せを絵に描いたような家族だったのにいったい何が起きたのかと、当時、友人や同僚の間にさまざまな憶測が飛び交ったものでした。

その後、伝え聞いたところによりますと、なんでも奥様がある日、突然、「私はあなたの海外赴任に二度も付き合いました。おかげで私のキャリアはズタズタ。子供も大きくなったことだし、これからは一人で自分自身の人生を構築させていただきます」

と宣言され、離婚届を突きつけたのだとか。あとはもう、まわりの説得や懇願にもまったく耳を貸さず、財産分与も何もいらないとおっしゃる、その決意の固さに、ご主人のほうもおとなしく判を押すしかなかったそうです。

なんか、すごくありません？ きっとほかに好きな人でもできたんだろうって思いましたが、そうではなかったようです。

・・・

察するところ、K 夫人は駐在生活を無事終え、子供を二人とも一流大学に入れ、家も建ててしまい、はたと立ち止まって人生を振り返ったとき、ある一つのものを手に入れていなかったことに気づいてしまったのです。それが 『日経ウーマン』や『アエラ』が無責任に煽る「キャリア、自立、自己実現」でした。まわりの男たちが「わからん」とつぶやいて呆然と佇むのも無理からぬこと。

また、K 夫人のズタズタになったキャリアというのが、高校教師という、そんなに「すごい！ かっこいい！」と人をうならせるほどのものでなかったから余計にパラドックス。きっと比較的地味で平凡なイメージのその仕事に実際に就いている女性たちの多くが、K 夫人の人生を華やかなものとして羨ましく思うことでしょう。

風の噂では、離婚後、K 夫人は予備校教師の職を得て、小さなマンションで憧れだった一人暮らしをなさっているそうです。本懐を遂げたところが潔い。一気に尊敬の念が高まります。

いっぽう、ご主人のほうは広い家での一人暮らしの侘しさに耐え切れず、たった一年でお見合いし、一〇歳以上も年下の（やっぱり若いのがいいのか）三〇代後半の女性と再婚されました。相手は仕事に疲れたキャリアウーマンで、楽そうな専業主婦にずっと憧れていたそうです。めでたし、めでたし。

・chemistry

「化学」という意味が一般的なケミストリーという語。男女関係について使われるときには、「セクシャルな引力」「異性として、ビピッとくる感じ」といった意味になります。

・ダイア

結婚以来、わたしはまだ夫からダイヤをプレゼントされたことがないんです。こんな屈辱ってあるでしょうか！

今年も誕生日の前にはショーウインドーの前に佇み、思い切り物欲しげなまなざしを夫に向けて「プレゼントには、あれをくれても全然かまわないんだけど……」とヒントを与えたものの、完全に無視され、「自分で買えば」と言われてしまいました。

友達にその話をしたら、「まさかー、嘘でしょ。ちゃんと“おねだり”したら買ってくれるわよ」と本気にされなかった……と、その話を夫にふりましたら、「そんな友達と付き合うなよ」と取りつく島もありません。

・doing for a living

おもしろいから、楽しいから、やりがいがあるからするのなんて仕事じゃない。自己実現のためなんて、ちゃんちゃらおかしい。それは趣味というものです。または、

仕事ではなく、“オシゴト”です。

ぶっちゃけた話、わたしのしている**文芸翻訳**ってほんとうにお金になりません。ベストセラーになるような作品を依頼される一部の**大御所翻訳家**の方たち以外は、時給にしたらそれこそマックやコンビニのバイト以下。だから、情けないかな、これまでわたしは自分に関するもの——洋服や美容代、交際費など——こそ自分の稼ぎでまかなってきたものの、住宅費、食費、車、光熱費、保険、子供の教育費、その他もろもろ、つまり生活の**インフラ**部分はすべて夫におんぶに抱っこな一生でした。家族がたらふく食べられるのも、旅行ができるのも、すべて夫のおかげです。これで、わたしが仕事を **doing for a living** なんて言えるのでしょうか？

そこで、いじけ倒したわたしはつい、自己紹介では変なアクセントをつけて「えーと、“オシゴト”は……」なんて言い方をしたり、「**パラサイト翻訳家**です」「**プチキャリ主婦**です」なんて言うてしまうのです。だからと言って、いい加減な気持ちで仕事をしているわけでは、けっしてけっしてけっして（しっこい）ないんですけどね。

・**プチキャリ主婦**

きっと若い女性たちの間に高まりつつある“**主婦願望**”の対象は、漠然とですが、**専業主婦**よりむしろこの**プチキャリ主婦**にあるのではないのでしょうか。類は友を呼ぶのか、わたしの友達には**プチキャリ主婦**が圧倒的に多い。元駐妻だと日本語教師、塾や幼児英語教室の先生、翻訳や通訳、サロネーゼ（「**キコク妻の再就職**」を参照）など。では、**プチキャリ主婦**たちがどんなにずるい存在であるか、その一員でもあるわたしが、ここは恥を忍んで暴露いたしましょう。

まこと、**世の中でプチキャリ主婦を妻にもつ夫ほどかわいいような存在はありません**。オシゴトを錦の御旗に家事は手抜き。専業主婦に比べると妻からの感謝の気持ちは薄い。なまじっか自由になるお金があるだけに、金遣いは荒い。白状しますが、集まれば白金や青山のフレンチレストランなんかで、サラリーマンしてる夫たちには口が裂けても言えないような値段のランチを注文し、「こんなランチ食べてるって夫には絶対内緒だわ」なんて言い合ったりしています。中には「うちの夫なんて、普段着は五年くらい買ったことないよ。年賀状用に家族写真撮ったら、五年前と同じセーターだったから、その写真使えなかった」などと言う人もいて、一同身につまされて爆笑です。そういうわたしたち自身は、みんな会うたびに違う服を着て、夫たちの昼食代の数カ月分に相当するバッグ（値段は夫には内緒）を持っているんだから、いやはや処置ナシです。この人たち、何か間違っていないか？

せめてものお詫びに、わたしは**プチキャリ主婦**が自己実現や暇つぶしに始めたオシゴトでたとえどんなに成功しても「**エライ!**」とは思わないことにしています。せいぜい「**ラッキーな人だな**」と思うに留めます。夫たちが**退屈**でつまらない仕事を引き受けてくれているからこそ、わたしたちは**お金**にならないけど好きなオシゴトを続けられ、冒険もでき、ガツガツしていないところからくる余裕が時に成功を生む場合もある。

けれども、やっぱりわたしが尊敬するのは、男でも女でも、あくまで仕事を **doing for a living** している人たちなのです。

・**離婚**

イギリスは約二組に一組の結婚が離婚に終わるほど離婚率が高く、しかもたった数年しか結婚していなくても、離婚時にはほぼ半々の財産分与が認められる国。その上、もし裁判でもめれば必ずといっていいほど女性側に圧倒的に有利な判決が下されるため、**稼ぎのいい男性や財産のある男性は恐ろしくてとても結婚に踏み切れない**という事情があるのです。しかも、今の若い人たちは自分たちの親も離婚や再婚を繰り返しているケースが多く、非常にシニカルで悲観的な恋愛観や結婚観を持っているといわれています。ニューヨークを舞台にした『**セックス・アンド・ザ・シティ**』に見られる“**まともな恋愛ができる確率の異常な低さ**” “**まして結婚に漕ぎつけるのは至難の業**”の現象はそっくりそのままロンドンにも当てはまります。